

---

# IS 《インフィニット・ストラトス》 唯一の痛み

サーシェス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス  
IS唯一の痛み

### 【Nコード】

N9353X

### 【作者名】

サーシエス

### 【あらすじ】

肉体の痛みを感じることでできない少年は少女を救い死んだはずだった。

だが目が覚めると自分は赤ん坊に……

2度目の人生の中、少年は何を思うのか……

駄文ですがよろしく願います。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、サーシエスともうします。

インフィニット・ストラトス  
IS復讐する紅き傭兵の息子  
インフィニット・ストラトス  
IS紅き傭兵の息子

は今日投稿できると思います。

最近不定期になりがちですがよろしく願います。

## プロローグ

### プロローグ

私の肉体は『痛み』を感じることができない。

このことを聞いてうらやましいと思つものもいるだろう。

だが、私にも唯一感じる事のできる『痛み』があるそれは……

『心の痛み』

これが唯一感じることできる『痛み』

誰も理解してくれぬ事のない『痛み』。

そして誰もこの『痛み』からは救ってはくれなかった・・・

私は車道で車に轢かれそうになっている少女が視界に入った。

気づいた時には私はその子を押し飛ばし、代わりに大きな衝撃を受けた。

空を舞った肉体が地面に落ちた、だが痛みは感じない。

ただいつもと違うのは、急速な眠気が襲ってくる事。

どんなに起き上がろうとしても動かないからだ。

この時、理解した。

私は死ぬのだと

そう思うと、どこか心地よくなった。

大人と助けて子供が何かを言っている中、私は目を閉じた。

『あなたにはまだ生きていて貰います』

そんな声を聞き、私は死んだ……

「名前は決まったのか？百合子」

「清司さん。この子の名前は玲二。森次玲二よ」

はずだった……

## プロローグ（後書き）

誤字脱字・ご感想がありましたらよろしくお願ひします

## 第1話（前書き）

活動中止といいながらも投稿するバカ作者w

鉄のラインバレルについて、説明しようと思いましたが時間がないので興味があればwikiで検索してみてください。

## 第1話

### 第1話

く玲二く

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRをはじめますよー。」

「(どうしてこうなった……)」

ここはIS学園。5年前に登場したIS操縦者育成学校、そしてISを扱える者は女だけなのだがこのクラスには2人の男がいる。私と……私の前の席に座っている男『織斑一夏』

「……斑君。織斑一夏君！」

「はっ、はい！」

何か考え事でもしていたのか。声が裏返り、周りからクスクスを笑いが聞こえる

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい、お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でも自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね、だから、自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

「大丈夫ですから先生、怒ってませんし、自己紹介もちゃんとしますから。」

「ほ、本当ですか？」

「え〜と、織斑一夏ですよしくお願いします・・・」

周りから『何かもつと言つてよ？』みたいな視線が送られてる。

「・・・以上です！」

がたたつ！思わずクラスの女子がずっこけた

スパアンツ！

・・・あれは出席簿で出せる音なのか？

「いつーーーーー!?!?」

「.....」

そこには見知った黒のスーツにタイトスカートに身を包んだ女性・  
・織斑千冬がいた。

「げえっ、関羽!？」

パンツ!

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえっ副担任ですから、これくらいはしないと……」

織斑千冬は生徒の方を向きながら胸に手を当てて

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いな」

『はい!』

軍隊発言をした。

だがそれに答えるのもどうかと……

「森次、自己紹介をしる。このバカと同じなら……わかってるな？」

手元の出席簿をちらつかせる。

あの頃の悲劇が思い浮かぶ……そういえばあいつは元気になっているのだろうか？

……まあいい。今は……

「私は森次玲二だ。趣味は読書、年齢は18と年上だが気にせず接して欲しい」

こんなものだろう。

『きゃああああ……!!』

これは耳が痛まないか？……まあ私は痛くはないがな

「イケメンでクール!!」

「ぜひともお兄様と呼ばせてください!!」

それにしても・・・窓ガラスに罅が入っているが気にしないのか？

「（じいさんとじいさでやっつけていけるのか？私は・・・）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9353x/>

---

IS《インフィニット・ストラトス》唯一の痛み

2011年11月4日11時50分発行